

令和8年8月千葉豪雨～POTEKA観測史上最高161.5mm/h～

VOL.23[2026.10]

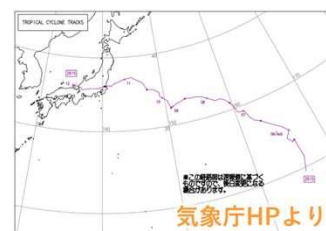
2026年8月11日の夜、台風15号チャンホンが茨城県に上陸し、12日にかけて日本列島を西へ進みました。茨城県への台風上陸は史上初です。近年、東北地方の太平洋側などに日本の東側から上陸する台風を見かけることもあります。それでも今回の進路は珍しく、この台風の西進により東から西への暖湿気流の流れの場が作られたとも考えられています。この暖湿気流の流入が、気象観測史上でも極めて異例となる、8月13～14日の令和8年8月千葉豪雨を引き起こす一因になったともみられています。

台風15号【図1】が通過した2026年8月13日も、千葉県を含む関東平野では、台風が巻き込んだ暖湿気流の流入により、日中も雨が降り続きました。この雨が上空の冷気を地上へ引き下ろしたことが主な要因で、埼玉県や東京都など千葉県の西側において、地表付近に丸い冷気の塊が形成されました。そこへなおも流入が続く暖湿気流が乗り上げることで上昇気流が発生し、冷気の塊の球形ラインに沿って弓状の積乱雲の列が発達しました。この積乱雲の列こそが、今回の令和8年8月千葉豪雨を引き起こした線状降水帯です。

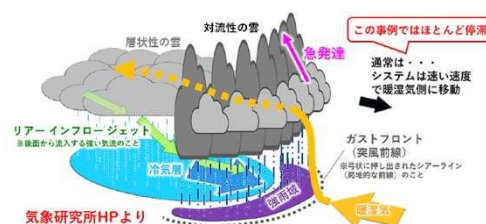
線状降水帯には、いくつかの型があります。最もよく見られるのは、バックビルディング型と呼ばれるものです。冷気側の風と暖気側の風が共に線状降水帯の列に沿って吹き、ぶつかり合うことで、積乱雲が同じような場所で次々と発生し、降水量が増えていきます。一方、今回の千葉豪雨で見られた線状降水帯は、図2のように、西側に形成された冷気の塊と東側からの暖湿気流が正面から強くぶつかり合う、スコールライン型と呼ばれるものです。バックビルディング型は、一つ一つの積乱雲による降水量はさほど多くないこともありますが、時には半日から1日ほどの長時間続くことで、降水量が多くなります。一方、スコールライン型は、短時間の降水強度は強いものの、通常は大気の流れなどに従い、1～2時間程度で西から東へ、暖気側の方へ通過していきます。

今回の千葉豪雨におけるスコールライン型の線状降水帯は、短時間で通過していくことはありませんでした。これは、冷気塊の東への進行速度と、通常とは異なる東からの暖湿気流の流入速度とが、絶妙に釣り合ってしまったためとされます。POTEKA地上稠密気象観測網により、地表付近でも西からの風と東からの風がぶつかり合う様子が捉えられました【図3】が、千葉県ではこの状況がほぼ半日にわたり続きました。

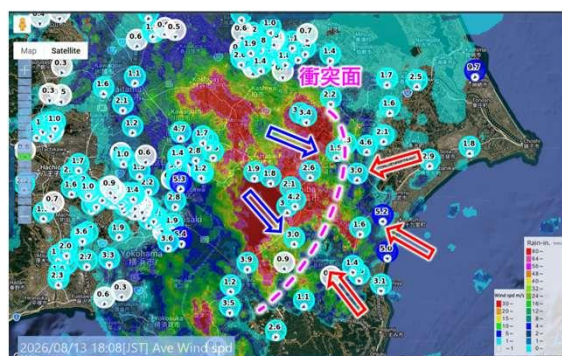
8月13日23時54分、大網白里市役所において、POTEKA観測史上最高となる161.5mm/hもの1時間降水量が観測されました【図4】。これは、アメダスの約50年の観測史における最高記録である153mm/hを上回るものでした。日本の内水氾濫などの治水対策やハザードマップの作成において、想定される最大降水量は153mm/hと設定することが多くあります。これは、153mm/hを超える大雨は降らないという前提があるためと思われます。今回のPOTEKAの観測記録は、単に最高記録を更新したというだけでなく、新たな、そして非常に重い警鐘を鳴らしている可能性があります。



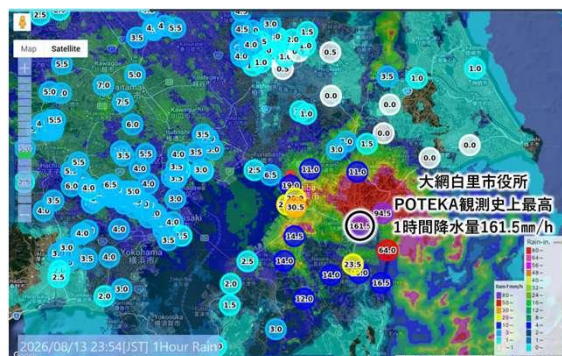
【図1】2026年台風15号経路



【図2】スコールライン型



【図3】8月13日18:08POTEKA NET風



【図4】8月13日23:54POTEKA NET降水量